

面、胴、垂れは日武剣道具本舗のミシン刺し剣道具「Air（エア）シリーズ」のもの。
甲手は同じくミシン刺しで、剣道部から贈られたミツボシの「峰」を愛用している。
デザイン自体はシンプルながら飾り糸のカラーリングに個性を反映させている



15

名手が 選んだ 剣道具

取材◆岡井博史 撮影◆窪田正仁

剣道具は己の身を守る重要な道具のひとつ。それと同時に使い手それぞれの個性を反映するアイテムでもあり、ともに戦う同志でもある。剣道界に名を馳せる名手たちが愛用する剣道具と、そのすべてを着用した姿を紹介する。



勝負カラーでオリジナリティを 勝見健太（大阪）

（かつみけんた）

1984年生まれ。錬士六段。岡山朝日高校(岡山)から同志社大学へと進学。大学卒業後、パナソニック(株)に入社。自身の主な戦績には、全日本実業団大会優勝(2回)、近畿実業団大会優勝、全日本都道府県対抗優勝大会3位、国体優勝、全日本学生選手権大会2位、関西学生選手権大会優勝(2回)、関西学生優勝大会優勝などがある

15 名手が 選んだ 剣道具

感じているのですが、やはりまだ試合をメインに剣道に取り組む立場であることを考えるとミシン刺しをセレクトすることが多いです。

今回紹介する剣道具もミシン刺しで、面、胴、垂れは2016年に購入したものです。神奈川県警に所属している弟の洋介の呼びかけで、私と洋介、そして三男の拓也も含めて兄弟3人で剣道具を新調しようという話になったことがきっかけでした。また、私個人で言えばその年はパナソニック剣道部のキャプテンを務める最後の年でもありました。キャプテン最後の一年々という特別なタイミングでもありましたが、当時の剣道部のテーマとして掲げていたスローガンが「変化と挑戦」だったこともあって、剣道具を一新するのは絶好の機会だろうという想いもありました。

兄弟揃って製作をお願いしたのは日武剣道具本舗さんで、僕は「A.I.R」と名づけられたシリーズのオーダーメイド商品を注文しました。私自身、剣道具については何よりも機能性の高さを最優先しているのですが、完成した剣道具一式は身につけてもいっさい自分の動きを妨げるストレスを感じることもなく、非常に満足のいく出来でした。

機能性を重視しつつ、飾りのデザイン自体はゴチャゴチャとしたものよりもシンプルなものを選びましたが、飾り糸の色についてはブルーやネイビーで統一しました。青系の色は私にとっての「勝負カラー」とでも言うのか、昔から自然と好む色なのでぜひこの剣道具にも反映させたいなど。せっかく剣道具を新調するのであればやはり人と同じなのはイヤというか自分なりのオリジナリティを出したいという希望もあり、たとえば面垂れ部分の飾り糸とアゴの段飾り、胴胸下部と小足部分、垂れの段飾り部分の刺繍は明るい色と濃い色とで交互に刺してもらっています。

また、自分なりのこだわり、いう点では胴胸部分の素材には見た目にも落ち着いた印象を与える牛紺革を

使用して、強化プラスチック製の胴台もただの黒色ではなくて表面にザラついて加工を施したものを選んできました。

この剣道具を身につけて臨んだ全日本実業団大会では、私のいた本社チームはベスト32で負けてしまいましたが、日々切磋琢磨している門真チームが見事に日本一に輝いてくれたのでキャプテンとしてはひとつ目標を達成できたかなという思いがありますね。

甲手については2016年の注文時にも購入していますし、大阪の加藤武道具店さんの甲手なども普段から愛用しているのですが、いま使っているものは2018年に剣道部のみんなからプレゼントしてもらったもの。当時私は大阪府の代表として全日本都道府県対抗優勝大会への出場を決めており、その記念として剣道部のみんなに贈っていただいた甲手です。ミソボシの「峰」というブランドのものですが、これは後輩からのオススメの品。私自身はそれまで「峰」を使ったことはありませんでしたが、後輩からの「使いやすいですよ」という評価も聞いていたのでありがたいただくことになりました。もともと購入していた甲手も充分に使いやすいかったのですが、初めて手に取った「峰」もとくに慣らす時間も必要とせず充分試合でも使えるほどのものでした。それに加えて、剣道部のみんなからの想いが込められているということが私にとっては何か目に見えない力を与えてくれるような感覚があり、この甲手を手放せないものになっている大きな要素のひとつになっています。

この一式が現在の私の試合用の剣道具で、実業団大会でこそ胴だけはチームでお揃いのものを身につけますが、それ以外の全国大会やその予選などすべての試合で使用しています。この一式は普段は自宅にて管理しており、試合本番あるいはその前日に戦いへの意気込みとともにこれを携えて試合場へと向かっています。

剣道具についてはかねてから興味こそあったものの、詳しいと胸を張れるほどの細かな知識は持ってはいません。おそらく同世代の皆さんも同じだと思いますが、少年時代は漠然とですが「高級な手刺し剣道具こそ良いもの」という認識があり、手刺し剣道具に憧れを抱いて過ごしてきました。実際に高校入学をきっかけに親に頼んで買ってもらったのはやはり手刺し剣道具一式。高校、そして大学時代まではその手刺し剣道具を使い続けました。

私がちょうど大学生活を過ごしている時期に流行り始めたのがミシン刺し剣道具でした。かつてのミシン刺し剣道具よりも使いやすく見た目も良く、さらに安価でコストの良い商品が登場したことで一気に剣道具業界の主流となった感があります。そんな流行もあって、私もそれ以降は稽古用、試合用ともにミシン刺しを愛用するようになりました。年齢を重ねたいまはまた手刺し剣道具ならではの重厚さという部分に魅力を

